

も、多くの魚が「なむら」をなして押し寄せたであろう昔はもう知る人もほとんどない。イワシさえ沖に出なければ網にはいらぬ。もはや元に返らぬ自然であろうか。

注1、春野村への合併の時、役場位置で難航したが、現在位置に決定したのは、その後の発展にとってまことに好条件を創出したことである。

“2、地質構造と地形との不一致は、変化して止まなかった地球の長い歴史からであろう。

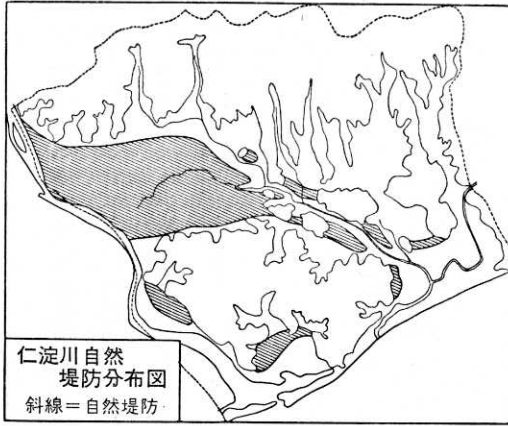
“3、高知市朝倉方面には洪積層の堆積台地があるが、春野町には洪積層の堆積を地上で見ることができない。不思議である。

“4、東西方向の地形、地質と、南北方向の川の流路との枠組は、一体どういう地殻変動で生れたのであろうか。

“5、弘岡上行当のクセイ谷の雑木林は、往古の原始林―御留山を語るように繁茂している。

“6、合理的―近代的教育が、人間の力を自然征服として教えたことに、問題があるのであろうか。

## 原始・古代編



### 米作りの開始―山根遺跡

#### 原始の春野

**鮒取新兵衛** たけと いまは豊かな農村生活と、便利な都市周辺生活とが仲よく共生している春野町に、はたしていつから人びとが住みはじめたのであろうか、ぜひ知りたいことである。もちろんこうした古い昔のことについては、歴史の研究にいつも使う記録というものはない。文字も使われていなかった時だからである。したがってそ

の研究は、昔の人びとが使っていた道具か、住居の跡を地中から掘り出して調べるのであって、これを考古学とよんでいる。戦前からもしつづこの学問は研究されていたが、戦後急に発達することになり、春野町の古い昔もこの学問によって大分はつきりしてきた。ことに町の教育委員会が、高知女子大学の岡本健児教授を団長として行なった昭和四十八年（一九七三）十月と、翌四十九年（一九七四）二月の秋山山根の発掘調査、さらに同四十九年（一九七四）八月の西分馬場末の発掘調査は、多くの出土品を得て成功を収め、春野町の歴史に貴重なページを加えることになった。以下はすべてこれらの結果に基づいて説明するものである。

いまから一万年ほど以前には、春野町の低地の部分は、ほとんど浅

い入江によって占められていたであろうことは前述したが、こうした入江は年々歳々に仁淀川本流とその分流、それに北部山地や南部丘陵から流れ出る溪流によって埋められ、しだいに陸化してくるが、多くはなお入江の状態が長くつづく。何千年にわたってである。しかしそうしたなかで、まず自然堤防といって、洪水のたびに堆積する土砂で川のへりに細長く連なる土地ができる。もちろん大洪水には水に覆われるが、そうでない時は、わりと洪水を避けることのできるよい所である。それとは別にまた、溪流が低地に流れ出るところに、扇状地という土砂の堆積地ができる。これも住むにはよいところである。

人が住むにはしかし何といっても食料である。春野町では今こそ自然の姿はかなり変ってはいるが、今から五千年前には山野に自然の食料が多かったであろう。川にはあゆ、ふな、こい、ごり、うなぎが豊富であり、海にはまた貝類や海苔類、いわし、ほら等が多く、沼地にはかもやしぎの類が冬はやってくるし、同じ時期に山にはつぐみなどの小鳥が飛来した。もともと山には年中いのししやしかもいたにちがいない。自然の与えてくれた食料は、このほかしい、かしの実、やまいもなど植物性のもも多い。ほとんど食料としてはことかかなかったように思われる。

すこし後のことであるが、春野町が自然の与えた食料にどんなに富んでいたかを示してみよう。「長宗我部地検帳」の森山分（実は秋山村）に

北イヲキ 出卅七代 同 鮒取新兵衛給  
一、巻反 上ヤシキ 同 し（喜津賀分）

この付近には「フナ神ニ良る」と、またふなに關係のあるものが住んでいる。ここは前述発掘の行なわれた秋山山根付近であって、もちろん読者のご承知の町役場の南方約二百メートルの所であって、西を小丘陵をもって囲

まれた段丘状の土地であり、北を新川が流れている。新川川が仁淀川の分流であったことには誤りはなく、もっともっと大きい川であったはずである。多くの魚族が棲み、その魚を捕えて長宗我部氏に貢納した者が、「鮒取新兵衛」「フナ神ニ良る」である。地検帳のころはこれらのいわば鮒一族が、川の利用について土地と権利とを与えられていたのであろうが、長い間を人びとは、自然の与える食料を自由に利用したものであろう。また「細川義昌日記」明治十四年（一八八二）三月十八日によれば、細川一家は甲殿へ磯草―海苔を採りに行く。

百足海苔大付きにて壺荷取り帰る、一同殊の外大愉快々々々。

と浜遊び―汐干狩りを喜んだのであって、このように季節々々に天の与える食料があったので、じゅうぶんとは云えないが、生活のなりたないことではない。人びとは入江のなから出てきた自然堤防や、扇状地など住み心地のよい所に住み家を求めて暮らしていきけるはずであった。だがこの数千年前の時期―縄文時代という―には、なぜか春野町に人びとが住んだという証拠はない。つまり縄文時代の人びとの残した遺物、遺跡がないのである。貝塚も土器もまだ発見されていないわけである。昭和四十九年（一九七四）七月春野町公民館での講演で、岡本健児氏は、土佐市野田から約四千年前の益野式土器が発見され、さらにまたすでに伊野町大テギからは石斧の発見があり、前者は縄文後期、後者は縄文晩期である。したがって春野町からいづれ研究が進めば、縄文時代の遺跡、遺物が発見されようといわれる。いまはそれに期待することしよう。郷土の歴史が悠久の昔から始まり長い年代をへて今日を築いたものであることは、これを受け継ぐものにとっては感銘の深いものである。ことに同氏によれば、縄文時代の後期、晩期は漁撈の文化が顕著であるという。春野町の自然条件にまことに適合するのであって、前記鮒取の起源に連なるのであるが、さらにこれはつぎの米作りとも無関係ではない。鮒取りの地にまず米が作られたからである。

